

瀧廉太郎と日出町

瀧廉太郎も日出町出身であることを称し、日出町もまた廉太郎を日出町出身者として待遇していた。

日出町出身者等で組織された「陽谷会」に廉太郎は入会しており、陽谷会が発行していた『陽谷雑誌』には、廉太郎のドイツ留学に際して、「四月六日 瀧廉太郎ピアノ研究のためドイツ留学の途に上る。これより先東京日出出身者は萬安亭に於て送別の宴を張り、宇佐美健吉氏（のちに日出町長となった人）壮行の辞を述べ」という記事が掲載された。

瀧家は代々、日出町佐尾の洞雲山龍泉寺に葬られているが、廉太郎は大分市の万寿寺に葬られていた。それは父・吉弘が万寿寺の足利紫山和尚と親交が深かったためである。その後の平成二十三年三月二十日、親族の意向により、万寿寺にある「瀧累世之墓」と、妹の「瀧郁子墓」、そして廉太郎が卒業した東京音楽学校の同窓有志者が建立した「瀧廉太郎君碑」が、祖先の眠る洞雲山龍泉寺に移設され、現在に至っている。

日出の人 楽聖 瀧 廉太郎



荒城の月

春高樓の花の宴
巡る盃影さして
千代の松が枝分け出でし
昔の光今いづこ

秋陣營の霜の色
鳴きゆく雁の数見せて
植うる剣に照り浴ひし
昔の光今いづこ

今荒城の夜半の月
変わらぬ光誰がためぞ
垣に残るはただ葛
松に歌ふはただ嵐

天上影は変はらねど
栄枯は移る世の姿
映さんどてか今も尚
ああ荒城の夜半の月

日出城址

僅か23歳と10ヶ月でこの世を去った音楽家「瀧廉太郎」。

日本最初の西洋音楽作曲家とも言われる瀧廉太郎は、その短すぎる生涯で、数多くの名曲を残した。

そんな瀧廉太郎が、日出町にゆかりのある人物であるということは、あまり知られていない。



瀧家累世之墓・瀧廉太郎君碑 [日出町・龍泉寺]
日出藩に仕えた先祖代々の墓とともに。

●日出町商工観光課 〒879-1592 大分県速見郡日出町 TEL0977(73)3158

●日出町観光協会 〒879-1592 大分県速見郡日出町 TEL0977(72)4255

名曲「荒城の月」の作曲者瀧廉太郎は、明治十二年八月二十四日、東京都芝区佐久間町に生まれた。彼の父をはじめ、その祖先は日出町に生まれている。日出町佐尾の洞雲山龍泉寺には廉太郎の祖先の墓二十九基が眠っている。瀧家の初代瀧五郎左衛門俊吉は紀州の藩士であったが、江戸勤番の時、お矢倉下で乱暴者を取り押さえた手柄が認められ、木下初代延俊に抱えられた。その後累進して武頭となり、恒川・山田・浅野と共に日出藩の四天王といわれた。以来、瀧家は十一代二百六十余年にわたり、日出藩木下家に仕え、日出藩の家老職などの要職に就くほどの名門の家系であった。

廉太郎の祖父、平之進吉惇は帆足萬里の高弟で、萬里と共に家老をつとめ、藩政の改革に寄与した人物である。

父の吉弘は祖父の平之進が家老時代二の丸に生まれたが藩末には三の丸の二十番屋敷（現在の日出幼稚園）に居住していた。慶応元年に十一代を襲名し武頭となり、藩主俊程に命ぜられて洋式操練を習った。慶応三年の大政奉還、翌々年の版籍奉還により、藩主は日出藩知事となり、吉弘は権大参事、後に大参事に昇任し政務に携わった。

廢藩後明治五年上京し、明治政府の役人として大蔵省・内務省に出任、大久保利通の秘書を務め、伊藤博文の知遇も得た。廉太郎はこの間に東京で生まれた。吉弘は東京の本省から地方に転出、神奈川県・富山県の書記官を務めた。明治二十二年からは郷土大分に帰り大分郡郡長を二年八月、直入郡長を四年務めその後退官した。文武にすぐれた有能な官吏であったので数々の逸話が残っている。

廉太郎は父の転任と共に家族と共に同行した。大分に帰り、竹田から東京音楽学校に入学、そして「荒城の月」の作曲までは十一歳から二十一歳までの十年間であるが、その間家族と又は単独で日出町に墓参し、三の丸の親族土屋家、小山家、長沢家、菅沼家、白井家、長尾家等を訪問したであろう事は想像にかたくない。その節、日出城の本丸跡の城下を訪れ、岸にくだける波の音が、多感な青少年時代の彼の耳に残され、あの名曲の旋律になったのではあるまいか。



銅像は朝倉文夫氏製作のもので、歌人の田吹繁子女史より寄贈された。朝倉文夫記念館、大分市遊歩公園、竹田市岡城跡、旧東京音楽学校奏楽堂にあるものと同型で、全国にこれら5体しか存在しない。

銅像には、「偉大な作曲家滝廉太郎は日出町出身 よって朝倉文夫作のこの像を町の皆さまにおくる 一九八一年三月 田吹繁子」と刻まれている。銅像は、昭和56年3月に日出町中央公民館前広場に建立され、平成22年4月に日出城址前に移設された。



洞雲山龍泉寺 [日出町佐尾]
瀧家の菩提寺であり、廉太郎と祖先の墓31基が眠っている。